

農業土木学会誌

JOURNAL OF THE JAPANESE SOCIETY OF IRRIGATION, DRAINAGE AND RECLAMATION ENGINEERING

04/05

Vol.72 / No.5

小特集●リスク評価とリスク管理



社団法人 農業土木学会

庚申塔のある分水工；淡路島三原町

— 扇状地を流下する農業用水（I）—

1. 上田池耕地整理事業

淡路島は温暖な気候のため、奈良時代から御食国と呼ばれ、食糧生産が盛んに行われていた。しかし、島ゆえに河川が短く、降水量も少なく、古くから用水確保に苦勞していた。諭鶴羽山地から流れ出る三原川の扇状地に広がる農地でも、たびたび干ばつの被害を受け、さらに水田に適した土地も畑作にしか利用できず、農家経済は不安定であった。

明治42(1909)年4月、耕地整理組合法が公布されると、用水不足に悩んでいた神代市、榎列の3カ村（現在、兵庫県三原郡三原町）は用水不足を解消するために、三原川の上流にダムを築造することにした。兵庫県は3カ村の申請により設計測量を行い、大正5(1916)年、その設計書を3カ村の村長に提出した。しかし、その事業費があまりにも大きく、受益も3カ村にまたがっているため、関係者の意思を統一し事業を開始するまでには6年の歳月を要した。

大正11(1922)年、耕地整理組合の設立認可を受け、

用水源の上田池を築造し、幹線水路7.5 km、560 haを灌漑することとなった。

計画されたダムは、上田池と呼ばれ、堤高41.5 m、堤長131 mの粗石モルタル工法による重力式で、当時としては画期的な農業土木事業であった。ダム工事とともに順次、用水路を建設し、135 haが新規開田され、総事業費1,082万5千円を費やして、昭和9(1934)年に事業を完了した。

2. 「上田池碑」に残された歴史

表紙の写真は、その幹線水路にある分水工のひとつである。残念ながら資料は散逸し、当時のことを知る人も少なく、設計の詳細なことはほとんどわからない。しかし、この水路の用水源である「上田池」の堤体のそばに記念碑（写真-2）が残っており、その碑文から当時の様子がわかるので、下記に抜粋した。原文は縦書きのカタカナ文で、格調あるものである。

事業前の地区の困窮状態については、碑文ではこのように述べている。（句読点、ルビについては筆者挿入）

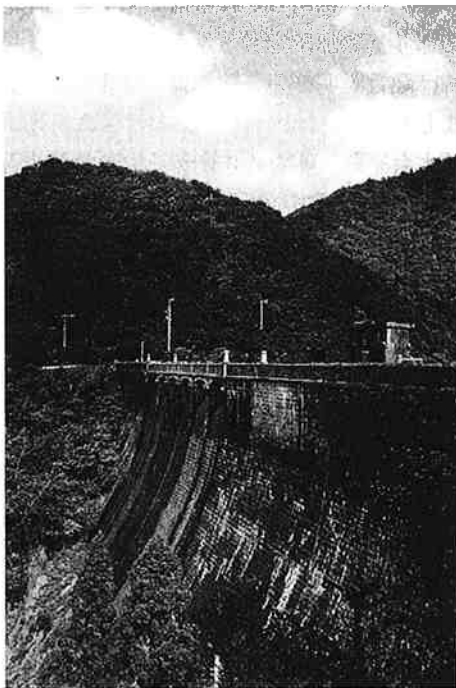
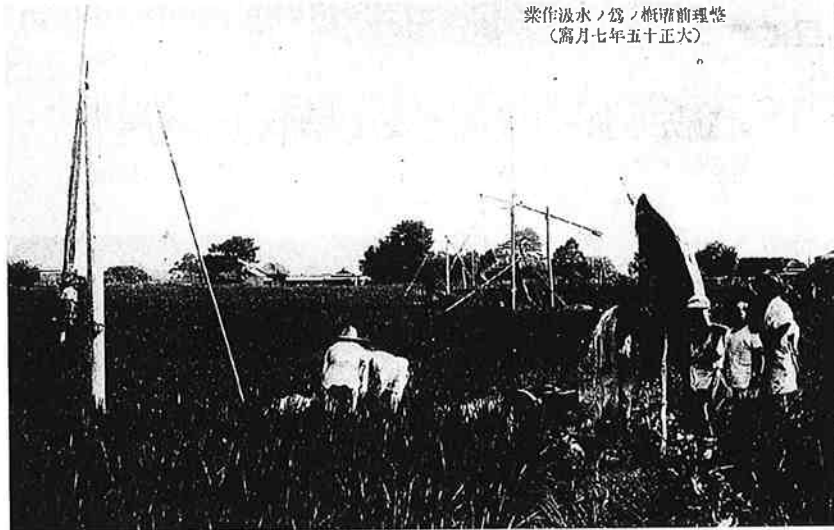


写真-1 現在のの上田池



写真-2 上田池碑



業作汲水ノ爲ノ概ね前理整
(高月七年五十五大)

写真-3 「跳ねつるべ井戸」による灌漑の様子
(大正15年7月撮影, 松本司氏所蔵)

「夫れ組合の地区たるや三原川左岸高地に存し、古来水利に乏しく灌漑用水は概ね之を地下水に需むるも、炎燠旬餘¹⁾に及べば忽ち枯渴し、秋実らす地力減耗、耕作を遺棄する者、年と共多し」

参考として昭和初期の写真を入手したので掲載する。三原郡の各所に林立していた「跳ねつるべ井戸」によって灌漑をしている様子(写真-3)である。用水確保に多大な苦勞をしたことが偲ばれる。

さらに、用水路に関するくだりを下記に引用する。

「而して用水路幹線延長4110間、一大動脈を形成し、数十條の支線之より分岐す。総を石造又は混凝土溝^{コンクリート}にして一度樋を放てば数十分間を出てすして、忽ち里餘^{りよ}を奔流し萬頃^{そそ}に灌く地区総面積565町歩、内開田136町歩、

往年旱害の地為に其憂を絶ち、瘠土一朝にして膏田^{こうてん}²⁾と化し、穰々佳禾^{かか}³⁾を生ず」

長年待ち望んだ用水路が完成して、田畑に水が流れ込んだときの人々の喜びが、目に見えるようである。

3. 庚申塔のある分水

さて、この分水を見守っているのは、「庚申塔」である。

庚申信仰は、もとは道教の「三尸説^{さんしせつ}⁴⁾」が起源であるが、土着の信仰とも結びつき、淡路島では江戸時代中ごろから盛んになったようである。この信仰は徹夜して夜を明かすというもので、60日ごとに巡ってくる庚申⁵⁾の夜には、地域の親睦を兼ねて「庚申講」が行われた。娯楽の少なかった時代には、2カ月に一度の楽しい宴会であったのかも知れない。また、水利のことや村のことを夜通しで話し合ったのかも知れない。今となっては、庚申講の夜は遠い昔話であり、上田池の歴史を語る人もまれである。

「ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたる例なし」(方丈記 鴨長明)

(文責：兵庫県淡路県民局洲本土地改良事務所 瓜生隆宏)

1) 旬餘(じゅんよ)：10日あまり。

2) 膏田(こうてん)：地味よく肥えた田。

3) 佳禾(かか)：よい稲。

4) 三尸説(さんしせつ)：人の身体の中には三尸という虫がいて、60日ごとに巡ってくる庚申の日に、人々が寝静まった夜、その虫が体内から出てきて天帝にその人の悪行を報告する。それを聞いた天帝はその人を早死にさせてしまう。このため、庚申の日は寝ないで夜通し起きていて、三尸が体内から抜け出さないようするというもの。

5) 庚申(こうしん・かのえさる)：十干十二支の組合せの一つで、60日または60年ごとに巡ってくる。